

1

「あげつく」編集チーム



「あげつく」編集チーム（札幌国際芸術祭事務局 マネージャー）

葛原信太郎 SIAF2024から札幌国際芸術祭に関わる。『新しい芸術祭のつくり方 札幌国際芸術祭 篇』企画・編集を担当。SIAF2024では雪まつり会場などを担当。

松本知佳 SIAF2017から札幌国際芸術祭に関わる。SIAF2024では広報やイベントなどを担当。

細川麻沙美 初回であるSIAF2014から札幌国際芸術祭に関わる。SIAF2024では統括マネージャーとして全体企画の統括、未来劇場などを担当。

トーク内容

- ・『新しい芸術祭のつくり方』通称「あげつく」は、単なるアーカイブ本ではない
- ・文化芸術イベントにおける広報媒体のありかたと、SIAFのゴーイングマイウェイスタイル
- ・内向けの目的:引き継ぎ資料／外向けの目的:SIAF2024の記録、その両立
- ・どうやって新しい方々と、新しい芸術祭をつくっていくのか
- ・「地域の行政イベント」と「国際的なアートイベント」のはざままで



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/1Fo2BObJPfI>





「あげつく」が単なるアーカイブ本ではなく、後半が「ハウツー本」のような体裁になっているのはなぜですか？

葛原：中にいると、事務局に携わっている人のバリエーションや、実際に芸術祭を作るときに求められる職種の多様さを強く感じるのですが、外にいるとなかなか分からないところかなと思うんですね。「あげつく」に書けていないこともいっぱいあるんですけど、極力包み隠さず、芸術祭っていうものがどういうふうに行われているのか、その構造をなるべく表現したいなと思ってまとめていきました。

僕自身は、編集やライティング、野外フェスの企画や運営を仕事にしている、今回が初めて芸術祭に関わる経験をしました。地方でやる芸術祭は、すごく限られた人の中でやらなきゃいけないと思うんですね。その中で現代美術とか、芸術祭の業界にいる人を探そうと思ったら、たぶん相当無理が生じるはずで。

ということは、もっと芸術祭を開いて、ぜんぜん畑が違う人にも来てもらう必要がある。「あげつく」を読んでもらうと、芸術祭の構造や求められる仕事の多様さが、多少わかるかなと思います。もともと芸術祭をやっている人にも、またこれから芸術祭をやってみたいと思っている人にも、なにか新しい視点を提供できたりすると嬉しいなと個人的には思います。

細川：私が初回の芸術祭に関わったのは、ある程度美術とか現代アート、メディアアートの専門性がある人材として東京から呼ばれたという経緯からでした。ただそれから10年経ったいま、人材の面からも「地域の人たちと一緒にやっていく」ということが非常に重要だと感じています。

開催準備を進める上では、なんでも対応できるイベント会社や広告代理店などの企業と協働することもあるわけですが、まず中の人たちが「なぜこういうことをする必要があるのか」「どう進めたらこれがうまくいくのか」を意識した上で、外の専門家と一緒に働いたり連携を組んだりすることが必要だと思っています。

また、美術などの専門知識と、ターゲットとなる地域で文化芸術を扱うノウハウは大きく違うため、その地域ならではの経験が重要になるように感じていて。この本を見てもらって「これだったら関われるかも」という人が増えていくと、もっといろんなバリエーションというか、おもしろい考え方を取り入れたチームがつかれるかもしれないなと思っています。

松本：私はもともと英語を勉強していて、学校を卒業して在住外国人の方の生活サポート、子どもたちの宿題を手伝う会など、プログラムを企画運営するコーディネーションをやっていました。そういう能力が芸術祭にも転用できる場所があって。もしかしたら私たちが思いもよらないような人材が活躍するかもしれない。そういうのも含めて知る、知ってもらえる機会になるといいなと思います。
